

● 優秀賞

演劇をコミュニケーション学習に生かす ～いのちを学ぼう、伝えよう～

千葉県船橋市立高根東小学校 かみ や とも こ
神谷知子

1 単元への願い

(1)なぜ「いのち」なのか

「いのち」を大切に教育の必要性が、各方面から叫ばれている。それを受けて、「いのち」について考えたり体験をしたりする授業がさかに行われるようになってきた。

しかし、本当に「いのち」を大切にしたいという思いが自分のものとして個々の心に落ちているかは難しい所である。それは「いのち」というテーマが、子ども達の日常から離れていて、漠然としすぎているという点に加え、教える側としてもやや扱いにくいものという意識が働いてしまうからではないだろうか。

そこで、普段は触れにくい話題にあえて正面から取り組むことで、真剣に語り合い、その思いを全校に提案することで、学校全体が「いのち」について考えることができるようにしたいと考えた。

(2)なぜ演劇なのか

では、どうしたら個々の子ども達が「いのち」への思いを深め、それを聞き手と分かち合うことができるだろうか。従来行われているような活動体験も有効な方法ではあろう。しかし、それでも直接体験だけでは限界もある。そこで本単元では、「いのち」の構成劇をつくり、伝えるという方法を行うこととした。

ここで「劇」という表現方法に着目したのは、劇の仕組みが「いのち」というテーマに大変適していると考えたからである。

「いのちを大切にしよう」とスローガンのように言葉だけで言っても、聞き手に思いまでは伝わらない。また、テーマが難しいために、ストレートに伝えようとしても聞き手が敬遠してしまうこともあるだろう。しかし、同じメッセージを伝えるにも、「劇」のフィクション性を生かし、さらに言葉だけでなく身体を生かしてエネルギーに表現することで、語り手と聞き手が同じ空間を分かち合い、想いを共有することができる考える。

また、劇を作る過程で話し合いや練習を重ねることで、学級全体に協同的なコミュニケーションが成立することも期待できる。

一人ひとりが「いのち」のメッセージを深め、「構成劇」という表現方法で全校にメッセージを発信し、ともに想いを分かち合うことで、「いのち」を大切にしたい気持ちが学校全体に広がるような、コミュニケーション学習を成立させたい。

2 演劇とコミュニケーション学習

(1)現在の演劇活動の問題点

教育における演劇の有効性は欧米では古くから認められ、コミュニケーション学習の一環として位置付けられている。それに対し、日本では一時期その教育的意義が語られたものの、現在では行事などで行うことが中心であり、コミュニケーション学習としての役割は担っていないのが現状である。そこで、現在の学校劇について考えてみると、以下のような問題点が浮かび上がる。

- ・教師主導型の指導
- ・明確でない相手意識・目的意識
- ・すべての子に役割を与える難しさ
- ・不自然な学芸会的表現

そこで、このような問題点をふまえ、演劇活動がコミュニケーション学習として成立するように、以下の特性を生かせるようにする。

(2) 演劇の特性を生かしたコミュニケーション学習

ア 自己を開く

普段の生活の中では、人間関係が固定化してしまい、それが原因で自己を表現することに抵抗を持つ子どもも少なくない。

しかし、劇ではロール（役割）を取ることで、普段は気付かない自己の内面を表現することにもなる。そして、人前で話すことに抵抗のある子どもも、自己を開放して伸び伸びと表現することが期待できる。

イ 物語性を生かす

演劇のコミュニケーション性のひとつに物語の枠組みを生かしてメッセージを伝える良さがある。物語を聞き手と分かち合うことで、作品の仕組みやストーリーを生かして、想いを伝えることができる。

メッセージを直接言うだけでは、意味内容を伝えることはできても、本当の想いまで届けることは難しい。しかし、物語の内容と自分達のメッセージを一致させて伝えることで、語り手と聞き手の間で「いのち」に対する想いを親和的に分かち合うことができるのではないかと考える。

ウ 協同的なコミュニケーションを学ぶ

本単元では、劇づくりという共通の目的のもと、様々な場面で必要感を持った話し合いがなされる。

例えば、台本作成時には、グループ全員の意見を聞き合い一定の時間内にひとつの結論にたどり着かなければならない。このような場の中で、相手の言葉を受けて返す「応じ

る」力や、結論に向けて話を運ぼうとするメタコミュニケーション力が働くことが期待される。

また、相互にアドバイスをし合う場面では、共通の目的のもと、話し合いの中から新しい提案がなされることが期待できる。

このように、みんなでひとつのものを作り上げる中で、グループの意見を調整したり新しい提案がなされたり、必要感を持った協同的なコミュニケーションが成立すると考える。

エ 非言語コミュニケーションを学ぶ

自分の声を相手に届けるということは、発声・発音の基本はもちろん、声の大きさや抑揚、間や速さを考えながら伝えるという、話し言葉の技能を高めることでもある。また、聞き手に想いをより効果的に伝える方法を考えることで、アイコンタクトを意識したり、表情や身振りなどの身体言語を自然に加えたりすることの必要性に気付き、非言語コミュニケーションへの意識を高めることができる。

なお、本単元では、より人と人との関わり合いの楽しさを実感し、非言語コミュニケーションを学ぶことができるように、主単元と並行して演劇のワークショップを帯単元として設定した。以下はその一部である。

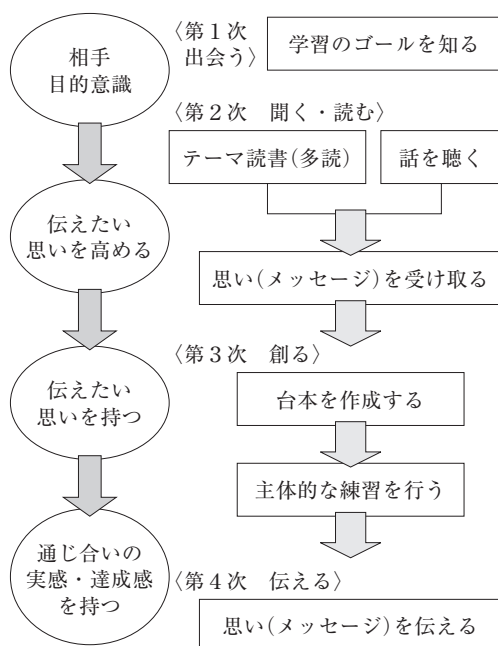
【帯単元で行った演劇ワーク（一部）】

ワーク名・活動内容	重点項目
言葉のキャッチボール	アイコンタクト
○丸く輪になり、架空のボールを「そーれ」と言って投げる。自分に向かってきたと感じた人が「はい」といって受け取るワークである。	
筆箱を語ろう	自己開示、アイコンタクト
○自分の筆箱の中身を紹介しながら、語り合い聞き合うワーク。4人グループで、1人ずつ自分の持ち物を紹介していく。語り手はアイコンタクトをとりながら語り、聞き手はうなずきながら聞くことを意識させる。愛着のある物を紹介することが、自己開示を促すことにつながる。	
カウントパス	声の力、感情表現
○数字を色々な感情を込めて、声に出すワーク。全員で輪になって座り、隣の人の顔を見ながら、1から順番に数を声に出してパスをしていく。授業者は最初に「笑って」「泣いて」「怒って」という指示を出し、数字を伝えるときはこの感情も一緒に伝えるようにする。	

ワーク名・活動内容	重点項目
話しかけレッスン	声の力
○自分の言葉が本当に相手に届いているか、声の力を実感するためのワークである。5、6人が不規則に座り、2～3メートル後ろからもう1人がそのうちの誰かを選んで話しかける。自分が話しかけられたと思ったら手をあげ、違う人だと思ったらそちらを指さすようにする。	

3 単元の構想

本単元の学習構造を図で示すと以下のようになる。



4 単元「いのちのメッセージを伝えよう」の実践

(1)いのちを伝えるってどうするの？

(1次 出会う 1～2時)

「みなさんのいのちはどこにありますか？」の問いに、戸惑い顔で頭を指したり胸を指したりする子ども達。「頭にあるのかな？」「ハートじゃない？」「体全部かな。」…など口々に困った様子。「いのちは一人にひとつずつ必ずあるのに、

見えないですよね。」校長が語り始める。「『いのちは大切』と口で言うことは簡単だけれど、具体的にはどうしたらいいのでしょうか。このごろは、ゲームやテレビの中で簡単に人が死ぬような場面があり、よけいに難しいですね。そこで、学校みんなで『いのち』について考える学習をしたいと思っています。みなさんには、全校が『いのち』について考えるきっかけとなるようなメッセージを伝えてほしいのです。」

子ども達は、「いのち」という大きなテーマにどう取り組んだらいいのか不安そうにしている。そこで校長は、自分の出産時の様子や「電池が切れるまで」の作者のことなど具体的な話をいくつかした後で、「いのちは見えないけれど、みんなの周りにたくさんあります。いろいろないのちをまず見つけて下さい。」と話を結んだ。子ども達は、全校にメッセージを伝えるという使命を与えられ、「難しそうだけれど、やってみたい。」という感想が多く見られた。学校長から依頼を受けたことで、学習の目的意識と相手意識が明確になり、意欲付けが図れたと考えられる。

その後、学校みんなに伝えるための方法として、自分達のメッセージを「構成劇」にして伝えることを告げる。すると「やったー」「はやくやりたい。」という多くの子ども達の陰で「やだなー。」「全員がやらなくちゃだめですか？」と不安そうな子ども達の姿も見られた。彼らの自己評価カードには、「大きな声が出せるか心配。」「みんなの前でやるのは恥ずかしい。」など表現に対する不安感や抵抗感を訴える内容が書かれていた。表現するということは自己を開放することが必要不可欠である。これらの児童に自信を付けさせる支援の必要性を感じた。

そこで、不安を少しでも取り除き、最終場面の具体的なイメージを持てるように、モデルとしての劇を視聴した。さらに、同じように劇づくりをした子ども達の感想を紹介した。

その中に「はじめは恥ずかしかったが、自分の思いが伝わった時とてもうれしかった。」など不安に答えるような内容もあり、「感想を読んで私のがんばってみたいと思った。」というように自信のない子ども達の意識を少しずつ変えることができた。

(2)いのちのメッセージを受け取ろう

(2次 聴く・読む 3～5時)

ア 想いの強い人から話を聴こう

愛着や想いの強い人、深い人から話を聴くことで、子ども達の想いや愛着をさらに深めることができる。そこで、その道の専門家として小児科の医師からお話を伺った。



●写真1/ゲストティチャーの話を聞く

【ゲストティチャーの話 (要約)】

みなさんは私が乗っている車椅子を見たことがありますか？これは私にとってなくてはならないものです。私は、母のお腹の中にいる時に、酸素が足りなくて病気になってしまい、手足が上手に動かないため車椅子に乗っているのです。私が医者になりたいと思ったのは、たくさんの見知らぬ人に助けてもらっているからです。みんなに支えてもらっている分、自分も誰かの役に立ちたいと思ったのです。

病院にいと、常にいのちについて考えさせられます。みなさんのような子ども達も病気と闘っています。時には悲しい別れもありますが、最後まであきらめずに、相手の立場になって思いやるのが、いのちと向き合うことなのではないかと思います。

皆さんの中にはじめはありませんか？実は私はみんなと違うという理由で、小さい頃はなかな

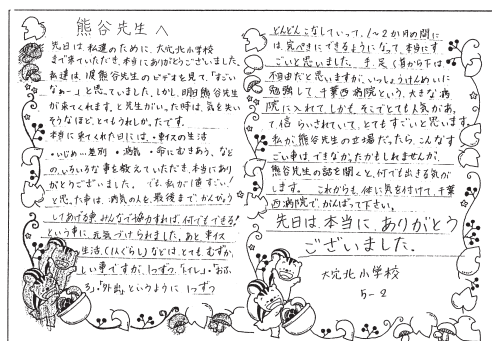
か友達の輪に入れずにいました。いじめは差別が原因で起こると思います。差別をなくす第一歩は、じっくりとコミュニケーションを取り合うことだと思います。

一人ひとりみんな違います。そして、誰もが選ばれて生まれてきたかけがえのない一人なのです。相手の立場になって、分かり合う勇気を持つことが、いのちを大切にすることにつながるのではないかと思います。

わかりやすい言葉で、時折子ども達への質問も交えながら、上記のような話をしてくださった。ここで子ども達は、「いのち」というものを生と死だけではなく、多方面から考えることができることに気付き、この見方がこの後の学習を支えていくことになった。

子ども達の感想を見てみると、話の内容についての学びや発見、感動だけでなく熱心に語って下さるゲストティチャーの姿に、「先生から何かが伝わってきたみたいで、ほくにもたくさんできることがあるのだということがわかった。」のように、語り手の想いやエネルギーを直接感じ取ることができた。

【ゲストティチャーへのお礼の手紙】



イ 本の中からメッセージを受け取ろう

本学習ではさらに、事柄に関する認識を深めるための手立てとして読書活動を取り入れた。

はじめに、本に対して興味を持てるようにブックトークを行った。「シリーズ いのちの授業 (全5巻)」(種村エイ子監修 ポプラ社)を基本とし、次の5冊を紹介した。

【ブックトークで紹介した本】

- | | | |
|---|--------------|----------|
| 1 | せいめいのれきし | リー・パートン著 |
| 2 | 赤ちゃんのはなし | マリー・ホール著 |
| 3 | おじいちゃんは106さい | 松田もとこ著 |
| 4 | ハッピーバースデー | 青木和雄著 |
| 5 | むったんの海 | 寺田志桜里著 |

このような選書をしたのは「いのち」についてより多面的な見方をしてもらいたいという想いからである。子ども達は楽しそうに話に聴き入り、自然にうなずいたりつぶやいたり、また驚きの声を上げるなどしていた。

次に「みんなの学習に使う本です。」と、約100冊の本を提示した。はじめはたくさんの量の本に抵抗感を持つかと心配したが、ブックトークで興味を持っていたこともあり、「早く読みたい。」「今日から借りていいですか?」という声が聞かれた。

本を読みながら、常に伝えたいメッセージを考えさせた。はじめのうちは「いのちの大切さ」や「自然を大切にしよう」といった抽象的なものが多かったが、読書量が増え、友達との交流の中で読みが深まるにつれ、「地球はだれのものでもない、みんなのもの。だから人間だけでなく、他の生き物のことも考えなくてはいけない。」「みんな愛されて生まれてきた、大切な存在。だから、いのちを踏みにじるようなじめは絶対してはいけない。」など、メッセージが具体的になり、伝えたい想いが強くなってきたことがわかった。これは、事柄に関する認識が深まることで、想いや愛着がより強くなったといえるだろう。

(3)いのちのメッセージを表現しよう

(3次 創る 6～10時)

ア 台本を作ろう

ここでは、受け取ったメッセージを自分達のものとして新しく生み出していく学習であり、自己表現力を高めると同時に、様々な場面での話し合いも学習の大切なねらいとなる。

まず、全体でテーマの分類を行い、自分の



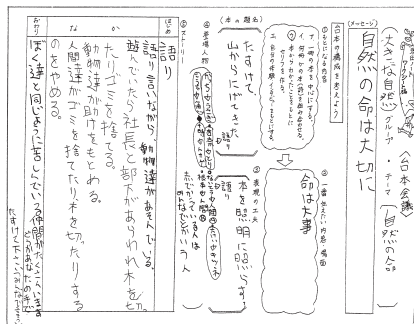
●写真2／グループで内容と表現方法を話し合う

希望するテーマごとにグループを編成し、内容と表現方法についての話し合いを行った。

その後、物語文と台本の比較をし、台本の特徴やライトのポイントをつかませた。

せりふ作りは個別に分担し、大体出来上がったところで話し合いながら、ひとつの場面を作っていく形を取った。

【ワークシート・台本会議】



【K子が原作を参考にして作ったせりふ】

私は、さいほうが得意です。一本の針からエプロンも作れます。これはあなぐまさんから教えてもらいました。実は、はじめは針が怖かったんです。でもそんな時あなぐまさんは、「大丈夫、大丈夫。落ち着いてやればできるよ。」と励ましてくれたの。だから一針一針ぬってみたの。そうしたら一週間もかかったけど、かわいい花のハンカチが作れたわ。それから、毎年森のみんなにお誕生日プレゼントを作ってあげられるようになったの。みんなとても喜んでくれて、私もうれしい。それもこれもあなぐまさんのおかげです。ありがとう、あなぐまさん。

【各グループが作成した台本】

テーマ	メッセージ	もともになった主な本	翻作や表現の方法
いのちのつながり (メインテーマ)	私たちのいのちはたくさんのもの や人に支えられている	いのちの図書館 いのちのつながり	身近でいのちを大切にしない行為を話 し合い、問題を語りと劇で表現する
地球上のいのちの 誕生	地球上のいのちは奇跡的に生まれ、 はるか昔から今も続いている	地球科学館 地球の始まり	大事な言葉をクイズに、また地球カレ ンダーや詩の群読で表現する
いのちのバトンを 受けつぐ時	私たちのいのちは大切に守られ受 けつがれてきたものなんだ	赤ちゃん、おかあさんが おかあさんになった日	自分の誕生の様子をもとにモノローグ、 大事な内容を対話劇で表現する
いのちのゴールを みかえても	大切な人が亡くなってしまっても 大切な思い出は必ず残る	わすれられないおくりもの だいじょうぶ、だいじょうぶ	2つの本を組み合わせ、人物のせりふ を作り変えて朗読劇で表現する
みんなちがって みんないい	いのちの重みはみんな同じ。差別 をする人はそれに気付いていない	わたしのいもうと いのちの重さ	絵本の朗読劇と、なぜいじめが起こる かを語り対話劇で表現する
自然が支える いのち	自然がたくさんのいのちを支えて いるのにそれを人間が壊している	たすけて ごみをポイポイ	2冊の本に共通している「たすけて」 を自分の考えたせりふで参加型の劇に

「いのちのゴールを迎えても」のグループは、『わすれられないおくりもの』をもとに、あなぐま以外の動物を変え、自分達で考えたせりふで、あなぐまへの思い出や感謝の気持ちを語ることにした。

また、「自然が支えるいのち」グループは、人間の手による自然破壊が原因で森に住むたくさんの生き物たちのいのちが奪われていく様子を、写真と「助けて」という言葉だけで表現した本を原作とした。このグループは、一人ひとりが森の生き物になり、自分の考えたせりふで助けを訴えることにした。ここでは、他の科学読み物なども参考にし、何が原因で自然破壊が起こるかを調べ、せりふにより想いが込められるようにした。

台本ができた段階ではクラス全員が伝えたい想いが「とてもある」「ある」と答えている。これは、自分達自身の手で台本を作り上げることができたという達成感が大きく影響しているものと考えられる。子ども達にとって、まさに「世界にひとつしかない自分達だけの台本」になったのである。

イ 台本を語りこもう

練習段階では、まずプロの方の語りを見ることが声の表情や視線、身振り等の非言語要素の重要性に気付くことができた。その後、個人やグループで覚えながら練習を重ねた。

文章で書かれた内容を自分の心や身体を通して、相手に伝える学習であるため、内容をしっかり理解していないと表現することはで

きない。気持ちを深く考えたり、相手に伝える表現の仕方を工夫したりすることで、伝えたい想いはより強くなっていったと考える。相互に見合う学習ではポイントを生かしたアドバイスができ、良さを認め合いながらもさらに良いものを作ろうとする熱心な話し合い活動となった。



●写真3／グループごとの練習

コミュニケーションの質を上げるためには、それが展開される場の設定も重要な要素となる。そこで劇場風にセッティングした音楽室で、照明と音響を入れてリハーサルを行った。いつもの見慣れた空間とは違った雰囲気の中、子どもたちの声や表情にも一段と張りが出てきた。

(4)いのちのメッセージを伝えよう

(4次 伝える 11～12時)

いよいよ自分達のメッセージを学校内の児童や保護者に実際の場で伝える学習である。

はじめは話し手はもちろん、聞き手もやや

緊張しているようであった。しかし、劇が始まってしばらくすると、面白いシーンで笑いが起きたり、語り手の話しかけにうなずいたりする聞き手の姿が見られるようになった。さらにクイズに楽しそうに参加したり、聞き手が一緒に声を出してくれたりすることで、話し手と聞き手の距離がいつそう縮まり、一体感のある空間が生まれた。

一方、1日目ということもあり、緊張からせりふや順番を間違えてしまう児童もいたが、その度にグループの友達が臨機応変に助けることができた。このように、互いに支え合う空気がクラス全体に満ちていた。



●写真4／真剣な表情で見る

観客からは「劇を見て、自分のいのちも友達のいのちも大切にしたいと思った。」「自分でもいのちについて考えてみようと思う。」「等の感想が寄せられ、想いが伝わったという実感を持つことができた。

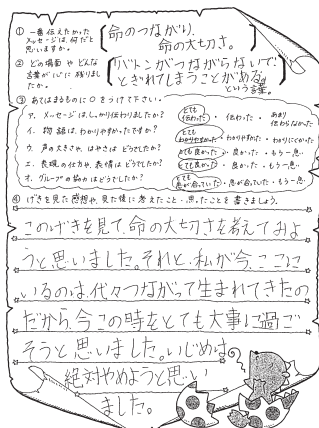
2日目は前日の成功を自信にして、さらに生き生きと表現することができた。観客に参加を促す場面では、会場みんなが声を出し支えてくれたことで、話し手と聞き手の心がひとつにつながったようであった。

聞き手である他学年の児童は、感想交流の場で「いのち」に対する考えが変わったことを率直に述べていた。また感想シートでは、「いじめは絶対にやめようと思いました。」「ふだんは何とも思っていなかったけど、誰か一人でも欠けていたら、私は生まれてなか

ったということが良くわかった。」など、「いのち」についての想いを真剣に語っていた。

保護者の方からは「全員が主役級の演技で自信を持って演じていて素晴らしかった。これも一人ひとりの心の中に伝えたい思いがきちんと落ちているからできたのだと思う。」「劇の訴えを聞き感動して涙があふれてきました。」など共感的な感想を寄せていただいた。

【聞き手の感想】



授業後の子どもの感想も「僕たちのメッセージをわかってもらえたのがうれしい。」「世界にひとつだけの劇が作れたのもみんなの協力があつたからだ。」のように想いが伝わったことの喜びとやり遂げた達成感にあふれていた。

自分達の想いを伝えることができたという経験は大きな自信となり、これからコミュニケーションを行う上での重要な原動力となるだろう。

【単元後の子どもの感想（抜粋）】

- ・地球のたん生、個性、いじめ、いのちのゴール……などなど、みんなが自分の意見をこの劇に入れられて、一人一人が大切な主役になりきれたことが、とてもうれしいです。
- ・この学習をやって、「ありがとう」といわれたことがうれしかったです。こんなにすばらしい、世界に1つだけの5年2組の劇を作れたことも、みんなの協力のおかげだと思います。

- ・前は他の人の前で発表するのが「いやだ」と思っていたけど、今は「自分の気持ちを、わかりやすく伝えたい」と思っています。
- ・この劇をやってみんなもいのちの大切さをわかってくれたと思うけど、私もとても勉強になりました。みんなが「うんうん」と聞いてくれたから成功した劇、そして5-2の全員が協力したから成功した劇だったと思います。
- ・「みなさんも…」と聞き手に呼びかけるところで、はじめは恥ずかしかったけど、だんだん慣れてきて、学校の人たちにも私たちの思いが通じたような感じがします！

5 まとめ

「『いのち』の本を貸してくれませんか？」
「私たちのクラスでも、いのちについて話し合うことにしました。」色々なクラスからダイレクトに感想が返ってくる。たくさん子ども達が「いのち」について自分なりの言葉で語っている。ひとつの小石が、水面に波紋を広げるように、学校全体に温かいコミュニケーションが広がっていくのを感じた。

本単元の劇づくりにおいては、みんなでひとつのものを作り上げる過程で、様々な学び合いが生まれた。その中でも、この実践が子ども達の心を揺さぶることができたと実感した、印象的な出来事は次のようなことだった。

A子は普段から積極的で、クラスでもリーダーシップをとることが多い。一方で常に主導権を握ってしまう傾向にあり、友達への指摘がややきつくなってしまうこともあった。

グループでお互いにアドバイスをする学習の前にこっそり、「Aちゃんのグループとは、やりにくい。」という子どもがいた。過去の経験から「アドバイスをしたら怒られそう」ということだった。「みんなでいい物を作ろうとしているのだから、遠慮しないで素直な感想を言ったほうがいいよ。」と述べ、様子を見守った。A子は友達の感想やアドバイスをやや固い表情ながら「うん、うん。」と真

剣に聞き、「もう一回そこをやってみるから、見て。」と練習を繰り返した。

本番1日目に、A子はうっかり自分のせりふの順番を間違えてしまった。しかし間違いに気付いたグループの友達が機転を利かせて、次につなげることができた。本番終了後にA子はグループのみんなに謝ったが、この間違いを誰も責めず、うまくフォローできたことを喜び合っていた。以下は1日目の本番後のA子の感想である。

「セリフの順番を間違えてしまって、とっても困った時に、友達がうまくつなげてくれてなみだが出るほど、とてもうれしかったです。みんなにはめいわくをかけたと思いますが、『だいじょうぶ』と言ってくれて、安心しました。これがまさに、本当の協力だということが、よくわかりました。」

A子にとって劇づくりという活動は、友達の良さを認め、本当の協力について考えるきっかけを与えたと言ってよいだろう。

この学習をして、クラスが仲良くなったと思いますか」という問いに対してクラスの全員が「とても思う」「思う」と答えており、中には自分で「とても思う」の上にさらに目盛りをつけて印をした子どももいた。

以上のように、本単元では「劇を通して自分達のメッセージを伝える」という目的のもと、一人ひとりが主体的な学習を行い、その過程で伝えたい想いを深め、聞き手との通じ合いを実感することのできるコミュニケーション学習が成立した。

そして何より、「いのち」の大切さを様々な角度から考え、学級のみinnで話し合い、その想いを学校全体に広げることができたという、満足感と達成感を得ることができた学習であった。